



気象台のお仕事

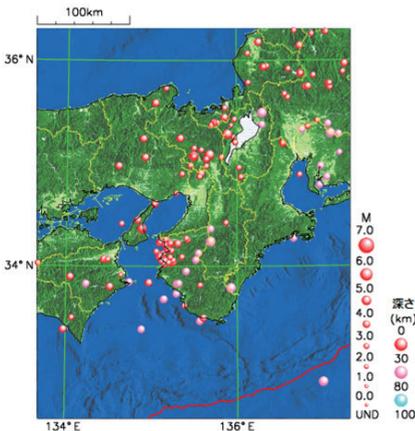
地震業務の最前線(後編)

大阪管区気象台 気象防災部
地震火山課 甲田 浩行

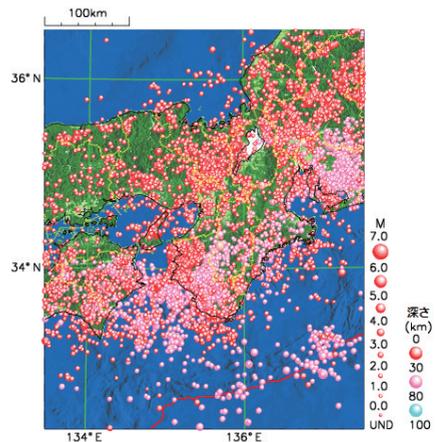
緊急作業の対象となる震度1以上を観測するような地震は、最近(平成26年)では1日当たり数10回程度と、それほど頻繁に起こる訳ではありません。平成26年の1年間で実際に震度1以上を観測した地震の数は、2,052回でした。平均すると1日に約5.6回となります。(平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震の直後1ヶ月は、震度1以上を観測した地震が東日本を中心に1日当たり149回と、とんでもない回数でしたが・・・)なので、「地震が起きていない間は暇なんじゃないの?」、とお思いになるかも知れません。もちろん、何もしていないということではなく、震度1が観測されないような小さな地震についても震源決定を行っています。日本は世界でも有数の地震国で、日本付近では震度1にも満たないような小さな地震も含めると全国各地で数多く発生しており、気象庁では平成26年1年間で約14万個、1日当たりで約380個の震源を決定しました。この地震データは、気象庁のほか、大学や研究所等が設置している地震計を用いて、緊急業務で行うものよりも高い精度で震源を決定しています。これらの震源データは大学などの各機関と共有していて、地震活動の研究などに使われています。

ところで、みなさんは地震計と震度計の違いについてご存知ですか?

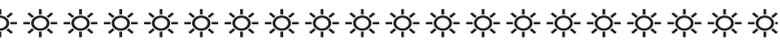
これらの違いは、その目的にあります。地震計は、地震の発生の監視がその役割です。いつどこで地震が起きても確実に分かるように、全国各地、地震以外の



震度1以上を観測した地震



左図+震度1未満の地震



ノイズ(車や電車などによる振動)を避けるため、山間部などできるだけ静かで地盤の固いところに設置されています。また、海洋で発生した地震をいち早く察知するために、一部は海底にも設置されていて24時間休みなく地震波形を記録し続けています。対して、震度計はその名の通り地震で起きた揺れから震度を計測することを目的としています。地震によって揺れたときにだけ処理が起動して、観測した揺れの大きさから震度を計算し、震度1以上であれば気象庁へデータを送り、震度情報として発表される仕組みになっています。こちらは、人が住んでいるところでどれくらいの揺れになったかが重要なので、人の多い市街地を中心に各市区町村に最低でも1ヶ所以上設置しています。

地震業務は、気象庁の業務の花形である天気予報とは違い、表に出てみなさんの目に触れる機会が少ない業務です。それでも、津波や地震情報が発表されるときは大きな災害となる可能性がありますので、今後も正確な情報をより迅速に発表できるように日々業務に取り組んでいきます。

また、地震火山課では、出前講座や現業室の見学等も行っていますので、興味のある方はこちらも是非利用してみてください。申し込み方法は、大阪管区気象台のホームページでご確認下さい。

最後に、繰り返しになりますが、日本は世界で一番地震の多い国です。地震はいつどこで起こるか分かりません。普段から地震についての備え(家具の固定等)や心構え(地震の際に身を守る行動)が地震からの被害を軽減することに役立ちます。また、海岸付近で強い揺れを感じた場合は、津波警報・注意報を入手できなくても、すぐに海岸から離れるなど「自分の命は自分で守る」ということを心がけてください。

こうだ ひろゆき(大阪管区気象台)



広 告